

それは試行錯誤の末の詩行錯乱か、獅子身中に
しめわたるしけた屍に過ぎないものなのか。20
世紀の頂点にそびえる文学者ウラジーミル・ナボ
コフが“*гений поэзии и проза прекрасной прозы*”（沼
野充義訳で「詩の身体と透き通った散文の精」『賜物』、
河出書房）と頭韻を踏みながら示唆するように、
韻文と散文の二項対立が時に転覆し時に並存しう
る文学の特徴について研究することが現在の私の
関心になっている。このようなテーマが一見無縁
な『東洋学術研究』にどう役立つことができるの
か、悩まない日はない。二項対立といえればロマ
ン・ヤコブソンが提起した無標・有標、日常的言
語と詩的言語、散文と韻文、換喩と隠喩など、ロ
シア・フォルマリズム以来の伝統に遡る。コンテ
クストとテクスト、あるいは、文学作品は思想伝
達の手段なのか、モダニズム的に文学作品の自己
価値性を認めるべきなのか。この観点はテクスト
構成に不可欠な「読者」の存立に関わってくる問
題であると考えられる。

ウラジーミル・ナボコフはロシアで西欧的議會

文学作品を読むこと——二項対立の超克を試みて 寒河江光徳

制民主主義の導入を志したカデット（立憲民主党）
の生みの親の一人である政治家ドミトリー・ナボ
コフの息子としてサンクト・ペテルブルクに生ま
れ（1899年）、ロシア革命が起きた年（1917
年）にクリミアに移住した。そこからケンブリッ
ジ大留学のための渡英を経て、ベルリン、パリ、
米国、スイスへと移り住みながら、一生をロシア
語と英語の文学作品の執筆に費やした。ナボコフ
が書く貴族的文体には思想伝達的な要素はなく、
形而上性は形象や美学と一体となって表明される
のが特徴である。『ロリータ』に代表される作品
の表面をなぞって思想的教訓の欠片もないと非難
することは誰にでもできる。しかし、私はそうと
は思わない。日常的言語と詩的言語が脱構築され
うるならば、高尚な教訓に無味乾燥で陳腐なトー
トロジーを、それとは逆に、言葉遊びのような芸
術至上主義的な文体に高尚な思想を見出すことが
できるはずだ。そして、このアプローチが東洋哲
学の解明にも役立つときがくると信じている。

（さ）がえ みつのり／東洋哲学研究所委嘱研究員